
White

檸檬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

White

【著者名】

檸檬

N5378U

【作者名】

【あらすじ】

マイペースお嬢様＝喧嘩最強

腹黒執事＝変態彼氏　ってこんなのがてあり??

「ふええ・・・零夜がいいのっ！！」

「柚鈴に触るなんて許しませんよ？」

こんな二人が金持ち不良校にやって来た！？

マイペースお嬢様の敵は全同学年女子の敵！！

一人がある暴走族に出会う . . .

華欄高校?といひやれ。

「ふえ . . . 零夜あ . . . 」

真つ暗な部屋。知らない部屋。

「どいお . . . 」

「柚鈴ー . . . どうしたの?」

「ふええんつれー やあ!!」

現れた探し求めてた人。

「いこいどい . . . ?」

「覚えてないの? 華欄高校だよ。

全寮制だからここに住むの。僕も一緒に」

優しく抱きしめながら話すこの人 . . .

橋零夜タチバナレイヤ

柚鈴の次に喧嘩強く、容姿端麗
柚鈴の専属執事であり彼氏でもある。

泣いてるのが紫苑柚鈴シオノユズ
紫苑財閥の一人娘。

喧嘩最強、容姿端麗、マイペース。

「（）」飯焦げちゃうから待つててね

「零夜 . . .

「ふふつおいで」

零夜は柔らかく微笑んで手を繋いだ。
この部屋を出ると良い匂いがしてきた
. . .

「 . . . オムライス」

「うん。好きでしょ」

「大好きっ」

零夜のオムライス久し振りだな . . .
楽しみっ . . .

「柚鈴、熱いから気を付けてね」

「はあー」

卵がふわふわトロトロでおいしいっ……

「おーしゃーーー零夜天才っ」

全部食べ終わってソファーでゴロゴロしてた。

「ありがとう。あ、柚鈴……」

「んッ……」

見上げると唇を舐められた。

「あ、お風呂入るわ」

お風呂……どんなのかなあ

「向やつしのの?柚鈴おこで」

え？ 柚鈴も？

「一緒に入るの？」

「当たり前でしょ」

ええ . . 恥ずかしいよーー！
裸になるって事でしょ？

「柚鈴一人で入るつ」

「だーめ」

だって高校生だよ？

なのに男の人と一緒に入るの？！

「ヤダもんーー！」

「強制連行」

ズルズルとお風呂まで連れてかれた。

「脱いで」

「嫌」

脱衣所でこのやり取りがもう5分程。
だつて彼氏の前で脱げだよ？
無理でしょ！！

「！？」

「いい子だから大人しくしててね」

「ここの脅迫する人の様なセリフを言つて
ワンピースに手をかけられた。

「やーーー」

「暴れないと」

「あんッ ． ． ．」

胸の先端を弄られて力が抜けた ． ． ．
暴れる度にいろいろされて結局全部
脱がされた ． ． ．

「柚鈴、濡れてるよ。」

「違う。」

髪を洗われて次は体。

零夜が普通に洗ってくれるわけない。

「ツ . . . あ、んつ . . . 」

スポンジを使って先端を擦つてくれる。

「体、洗つてるだけなのに感じてるね」

甘い声で囁いてくるからもう大変 . . .

「ねえ濡れるよ？ 中も洗わないとな」

「んあ . . . や . . . は、う」

指が進入して蕾を刺激する。

ビクン

「ああシー・・・・・・」

シャワーをしながらうなづいていた。

「ちょっとイジメ過ぎたかな」

クタッと零夜にもたれ掛かる柚鈴を見て
楽しそうに笑った。

「『めんね、柚鈴』

もう柚鈴に意識はないからけやんと体を
洗つてお風呂をでた。

え、そんなのあり?

「やだ . . . 」

「じめんね、後は先生と行つてね」

「零夜あつ . . . 」

「いい子にしてたら、じゅうじゅう褒美あげるよ」

「だんだん遠くなつて、背中をジッと見ていろると

「君が柚鈴ちやんだね。さ、入ろうか」

ゾクツ

「気持ち悪 . . . 」 ボソッ

耳元で話すハゲに寒気がした。

「柚鈴ちゃん自己紹介して」

「紫苑柚鈴」

キモイ．．．柚鈴が着てるの膝位の半ズボンに
上は薄い長袖のシャツなのに．．．
ズボンの上から内腿触つてくる．．．

「席はあそこだね」

パツとハゲから離れて窓際の席に座った。
ハゲが教室から出ていくと囮まれた。

「彼氏いる？！」

「ちょっと抜け駆けしないでよーーー！」

「俺と付き合わない？」

「どうから来たの～？」

男女両方。

「てか女の子だよね？なんでズボンなの？」

「まあそれ制服じゃなくね？」

「まあ一応女だしこれも制服じゃない。」

「柚鈴はスカート着ない。」

「でもこここの男子用の制服も嫌」

「声可愛」――――――

「うふ、俺やっぱ……」

「なんなの？それより普通だ、女子って……
転入生をイジメるんじゃないの？」

「あの……や、柚鈴様と呼ばせてください――！」

「はい？大丈夫？」この子……
……いや、この子達。

「なんで……？」

「お、覚えてませんか？？」

私 . . . 朝あなたに助けてもらつたんです

・ . . . 朝？あ、そういえばそんな事も . . .

「ああ . . . 大丈夫だつた？」

あんなのに引っかかるつちゃ駄目だよ」

数人の男に囲まれてた子。

「は、はい！！」

いい返事に少し微笑むと真っ赤に . . .

「え . . . えうし」「柚鈴様〜！...」「...」

「私達（俺達）も呼ばせてください〜！...」

・ . . いいクラスなんだろうけど疲れる。

「勝手にして . . .」

なんか疲れた。すつごい疲れた。
あのハゲの事もあつたし . . .

「 . . . 帰る」

「 「 「 お見送りします . . . 」 」

なんで聞こえてんの . . . ?

「いや . . . 電話するから」

そんなシコンとしないでよ . . .

「 零夜 」

『もう終わったの?』

「まだ . . . でも帰る」

『駄目だよ』

「じゃあいい 」

『え? 柚鈴 . . . プチッ』

今になつてハゲに触られた感覚が戻ってきた
気持ち悪い、気持ち悪い . . .

「 . . . つ

急ぎ足で教室をでた。

「 . . . はあつ . . . う

苦しい 息が出来ない

「れ . . . い や

なんとか保健室に辿り着いてベッドに
倒れた。

苦しくて意識が遠のいていった . . .

零夜 side

『零夜』

「もう終わったの？」

『まだ . . . でも帰る』

「黙田だよ」

『じゃあいい』

「え？ 柚鈴 . . . ツーツー

「どうしたんだ？」

「なんか . . . 嫌な予感がする。」

柚鈴がいるのがA棟で授業のする教室がある。
俺がいるのがC棟で病院みたいなもの。

「迎えに行きますか」

仕事を中断してA棟へむかつた。

「柚鈴…………？」

「いない、教室に…………」

「紫苑柚鈴どこ行つたか知つてますか？」

「ゆ、柚鈴様は帰るつて言つてました」

柚鈴様…………なんか変な事になつてる。
…………帰るつて言つても俺がキー持つてるから
帰れないはず…………

「あの…………柚鈴様苦しそうでした」

「苦しそう?」

「なんか、あつたな。

「はい…………息が不安定でした。

だから…………」

保健室にいると思います。それを聞いたら

走りだした。

「…………柚鈴っ」

「シ…………やめ…………」

保健室に入ると苦しそうに顔を歪めてる柚鈴。
寝てるみたいだけど…………泣いてる?

「柚鈴…………」

「れ…………や…………?」

うつすらと開いたエメラルドグリーンの瞳に
涙が滲んでる。

「零夜っ…………ふえ…………う…………」

なんか最近よく泣くなあ…………
可愛いからいいんだけどね。

「よしそう…………泣いたの?」

思わず優しい声がでたりね . . .

「 。」

俺に言えない様な事、ね。
まあ言つてもうつけど。

「 言つてくれないとまた怖い思いするよ? 」

多分、この学校で起きた事。

「 . . . あのね

柚鈴 side

「 . . . 先生がつ触つてきて . . .
気持ち悪かった . . . つ . . . つ . . .

「 先生 . . . ? 」

声……低くなつた？

「その先生つて誰？」

「ハゲの担任」

「そつか。怖かつたね」

「……んッ……ふあ、……やは」

しまつた……、「保健室」

「れえや……部屋帰ろ？」

「……今とめるの？」

ベッドに倒されて服に手かけられてる。

「……もつ暗いから帰りたい」

「わかりましたよ、お嬢様」

「ちょっと拗ねちゃつた……？」
でも眠い……

「い」むんね?」

「今度は覚悟しておいてね

そう言つて眩しい笑顔を見せた零夜が
少し、いろんな意味で怖かった . . .

「帰^ハい^ハうか」

「ん . . . 」

やつぱダメダメだ
・
・
・

「」

「まだ仕事残つてるんだ
・
・
・
・
・」

仕事 . . . あるんじゃ駄目だね . . .

「柚鈴30分くらい待てる?」

二
待
つ

母さんや父さんがいる時だけ。
ここは寮だからいい。

「ココア飲む？」

「……自分でやる」

仕事、早く終わらせてほしー ． ． ．

「危ないよ」

終わらせないと一緒に寝れない ． ． ．

「 ． ． ． いいから仕事して」

「わかったよ」

． ． ． ハハタリビササガんだつけ。

えつと ． ． ． 粉だから温めた牛乳をいれるだけ。

「簡単じゃん ． ． ． 」

牛乳を計つて火にかけた。

「ふあー ． ． ． 」

眠い ． ． ． でも怖い。

「も、いつか」

コップに粉をいれて牛乳をいれる。

ガチャンッ

「熱ツ」

「柚鈴！？」

鍋、落としちゃつた . . .

「冷やさないと！..」

結局零夜の邪魔しちゃつてる」 . . .
ほんと、なんも出来ないな . . .

「大丈夫だから零夜し「駄目！..」

水を当てられたとこがヒリヒリする。

「邪魔……だよね

自分のワガママで待ってるの、
邪魔しちゃうとか……ありえないよね。

「仕事はもういいから寝よう?」

たぶん、ここで寝ると零夜は明日早く
起きて仕事を片付けるつもり。

「……一人で寝る

平気、数分で寝れる。

少し我慢すればいいだけ……

「怖いんでしょ

「怖くない……」

柚鈴の部屋に入つてベッドに潜つた。

「……つ……」

怖くない、怖くない怖くなー。.
柚鈴がこんな事で怖がってたら“あこひ”
に笑われる。

「ほんなに震えちゃって。. . . 嘘は眞田だしじょ?」

あんなハゲに触られただけでこんななんになるなんて。. . . やっぱ女なんだ。.

「先生にビリ触られたの?」

「だいじょつ。. . . んッ。. . . あ。. . .

「嘘つぐの。. . . 謙し直れなことね」

今日ねやうなこつに言つたの。. . .

「ビリ。」

「. . . や。. . . シん。あ。. . . うが。めう。. . . も。. . .

正直に嘘つと体を触つてた手が止まつた。

「内腿？　・・・」口は触られてない？」

「ひあッ　・・・！　内腿、だ・・・けつ・・・」

もつ濡れてる秘部に零夜が指をいた。

「柚鈴、明日からは安心して学校行けるよ」

そんな事言つまえにこの状態どうにかして

「寝こんでしょ？　一緒にいるから寝て」

「仕事　・・・」

「もつ終わったから。ね？」

その声を聞いて零夜の腕の中で眠つた。

離れないで、お願ひ。

「んー……れ、や……?」

「おまよひ、柚鈴」

朦朧とする意識の中で声が飛んだ。

「……もう少しあと……」

「ダメ。遅刻するよ」

でも、学校に行く=零夜と離れるってこいつ
方程式ができる。

だからまだ離れたくない……

「やだつ……零夜といったいのつ……」

またあのハゲと会つのは嫌だ。

「つ・・・あんまり可愛い事言わないで」

抱き寄せられて零夜の顔見えないけど
耳が赤い・・・

「・・・朝食、柚鈴になつちや、つよっ。」

びくつ

「・・・いいもん」

ハゲに触られるよつずつといい。

「・・・早く着替えて」

体を離されて見上げると呆れてる。
でも、嫌だ。

「・・・やだ」

「は・・・好きにして」

え 。

やだ、行かないで . . . つ

「れー やつ . . . 」

呼んでも振り向いてくれない . . . 。

「 う つ . . . 」

泣きながら学校の準備をする。

ガチャ

「 . . . れい、や . . . ？」

いない。リビングにもいない。
おいてかれたの？

「ふえ . . . つ . . . う . . . 」

「どーしたの？」

△棟まで歩いて、あんまり人気なさそつな
中庭でしゃがんで泣いていた。

「あ。キミ、柚鈴“様”でしょ？」

零夜じゃない。．．．誰、この人。
はちみつ色のふわふわした髪に青っぽい瞳。
可愛い、男の子。．．．

「俺、同じクラスの九嶋唯。
唯って呼んでね柚鈴ちゃん」

ここに気持ち良いよね～なんていいながら
隣に寝転ぶ唯。

「ねえ、どうして泣いてたの？」

「．．．。」

今知りあつたばかりの人に話すわけないでしょ。
それよりも零夜が来てくれない。
いつも、昔から泣いてる時は側にいたのに。

今は、いない。

「話したら楽になれるかもよ。」

「…………ひめやこ」

今日はもう授業受けた気分になれない。
立ち上がって携帯をだした。

『もしもーし！…柚鈴からかけてくれるなんて
パパ感激！！』

相手は、父さん。

「…………なんか仕事頂戴」

『…柚鈴、なにがあったか知らんが

感情まかせに殺ればお前が殺られるだ』

“仕事”このキーワードがでた瞬間真面目な
声色になるこの馬鹿親。

「暇だからやるだけ」

授業にでる気はさらさらないけど何か
してないと泣きやう。

『……宮沢組、薬を売ってる所だ。』

柚鈴一人でも十分だが念のために
零夜を連れてくといい』

宮沢組 一人でも10分もかからないね。

「……了解」

歩きながら電話してたからもう寮の前。
部屋 に来たけど、鍵は零夜
入れないじやん。

「つ……」

会いたい、でも怒ってる。

「服、買おう……」

どつかで黒い服買って富沢組行こう。
たしか敷地内に服屋っぽいのあったよね。

「……これでいいか

下はスウェットに上はフード付の黒パーカー¹
を買って富沢組に向かった。

「いんなもんかな」

途中、公園のトイレで買ったものに着替えて

“黒猫”になる。

富沢組がいるからこの辺は昼間でも静かで
人通りもほとんどない。

だから人の目に付かずに富沢組に行ける。

「誰だてめえ」

富沢組の門を開けると団体のデカい男2人。

「組長だせ」

黒猫の時は男としてやつてゐる。

「何の用だーー。」

「高沢組を漬しに来た」

れつわと終わらせよつ。

男が殴りかかってきたのを受け止めて
鳩尾を殴り氣絶させる。

「なめんじゃねえーー。」

おっそい . . . ほんとに組員?

「うぐあ . . . 」

軽く蹴つただけなんだけど。

弱いなあ . . .

「侵入者だーー殺れーー。」

一気に集まってきた厳つい男共、
気持ち悪いなあ、田代ちやつてゐし。

「曉姑」——

ほんつと数だけだよね、こいつら。
倒れてる組員を横目に組長の所に
行くまでもなかつたね。

「なッ　・　・　なんだこの有様は！　！　！」

直々に出てきてくれたよ、組長さん。

「 · · · ! ! 黑貓」

そんな有名だつたかな。

「樂やつてゐるひつこな

ゆづく歩み寄る。

「ヒツ・・・・・、許してくれ……」

銃を向けると怯えだし、座りこんだ。

銃で怯えるなんて・・・よく組長やつてれたね。

「わよなひ」

バンッ

組員と同じように倒れた。

「10分かかってないし・・・」

またトイレで着替えて学校に帰る途中
咳いた。

「柚鈴」

「・・・・・?」

なんで・・・・・・・・・・

「どこ行ったの」

学園の門に寄りかかってる零夜。

「柚鈴、おいで」

躊躇しながらも近付くと腕を引っ張られ、
零夜の胸にダイブ。

「……泣いたの？」

目、赤いよと言いながら瞼にキスを落としてく。

「富沢組、一人で行つたでしょ」

「……だつて零夜怒つてたもん」

そう言つて見上げると困つた様に笑つた。

「怒つてないよ。ただ……」

一度言葉を止まり視線があう。

「柚鈴が可愛くて止まらなくなりそうだった

顔に熱という熱が全部集まるかんじで、絶対いま顔真っ赤！！

「柚鈴いなくて旦那様に連絡したら

宮沢組潰しに行つたつていうから・・・

「・・・ごめんなさい」

心配かけちゃつた・・・

また、ワガママな行動で。

「ふふ、なんで泣いてたのか教えてくれたら

許してあげる」

なんか、もう・・・主従の関係崩れてる。

従者のはずの人に許してあげるって・・・

それに理由なんて恥ずかしくて言えない！！

「せいいち」

「許さなくていいの？」

「……っ 零夜が！ 離れてっちゃうと思つたのっ

また真っ赤になりながら言葉を発した。

「よハドもはした。いい子だね」

たいして歳変わらないしーー

「もう離れないで・・・?」

「ふふつわかってるよ」

え、あ・・・う・・つて意地悪・・

「それと・・・柚鈴、あの教師もういなじよ」

「ほえ？」

「俺の柚鈴に触つたんだから・・・それなりに」

「ツんん・・・・ふ・・・・つ・・・あ」

「ここ裏庭つ・・・誰か来ちゃうかも・・・！」

「や・・・・つれい・・んツ・・・」

「俺はこじどもいいんだけど柚鈴が、ね」

キスでもう足がガクガクする・・・

「ふふつ、立てないの？ 可愛い」

耳元で囁かれるだけで甘い声に体が反応する。

「零夜 . . .」

「ん？」

横抱きして私の頬にキスをすると
歩きはじめた。

ぼーっと零夜の顔を眺めると、

「 . . . 柚鈴？」

「え？」

「手 . . . どうかした？」

「あ . . . んーん何でもない」

無意識に零夜の顔に手を伸ばしてた。

「危ないからちやんと首に回して

「 . . . うそ

———
— 零夜が満足（笑）した後 —————

「んー . . . ふあ . . .
「 . . .

「柚鈴、立てる？」

うー . . . ねむい . . .

「うーあ、ー . . . いたあい . . .
「 . . .

無理、立てない。
腰痛い！！

「じめんね。柚鈴が可愛いかったから . . .

「なつ ! !

ひょいと横抱きしながら笑った。

「どういへんの？」

「今日の夕飯講堂でいい？」

כָּלְבָּיִן

さわづ

「あの人力ツコいいー・・・」

「抱かれてる子誰??」

あの子は愛しくね？」

「目立つね」

あれ、なんか零夜不機嫌？

「ねーやへやへ座りへやへ

不機嫌な時は余計な事に触れない触れない
・・・

「ん、奥の席行くね」

ちゅつ

・・・えー？ 既見てたよね？

「馬鹿零夜・・・」

「ふふ、柚鈴を変な目で見てる奴らが
いるからね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5378u/>

White

2011年9月3日14時39分発行